

魅惑の帰郷

ー甘母と美姉妹が待つ家ー

小日向諒／宮坂景斗

タイトル



目次

序章	帰省	魅惑の母娘
一章	夏休み	美母で失う童貞
二章	冬休み	クールな姉の熱愛
三章	春休み	最愛の少女と結ばれて
四章	団欒	甘く淫らな家族愛

タイトル

序章	帰省	魅惑の母娘
----	----	-------

地平線の彼方へと太陽が牽引され、微かな夕焼けを残して夜の帳が空を覆った。  
厚く千切れた雲に邪魔されながらも天空の隙間から星が輝き、白く冷たげな月光が  
街を蒼く照らしているのに、真夏の夜は憂鬱なまですしりと暑い。

夜陰に混じって吹くそよ風はじつとりと生温かな粘性を帯びており、民家の間を縫  
い胡乱で怠惰な渦を巻く。近くに小川が流れ、平地に敷かれたいくつもの田圃がある  
ためか、梅雨が終わったにもかかわらず蛙の重奏が周囲にひしめいている。

おまけに路肩に並んだ街灯を陽光と勘違いしているのか、鉄の喬木にひしと張り付  
いたアブラゼミが、けたたましい鳴き声をまき散らしていた。

一秒でも早くエアコンの効いた自宅に駆け込み、ガラスの表面に冷たい滴を結露さ

せ、氷の浮かんだ麦茶を呷りたくなる、気怠く蒸し暑い夜――。

それなのに、大学が夏休みに入り地元である齋美市に帰郷していた鈴笠康太郎は、自宅の玄関を目の前にして無為に右往左往していた。

時折、インターホンを押そうと指を伸ばすも、ボタンに触れる直前で腕を引つ込め、眉根を寄せて忸怩たる吐息を零す。

(……ここまで来たら、もう入るしかないのに)

自分のしている行動が空虚な愚行であると、康太郎は充分に自覚している。あらかじめ、実家にいる母と姉には今日この時間辺りに帰ると連絡をいれてあるのだ。

今から踵を返し、一人暮らしをしているアパートへ蜻蛉返りするわけにはいかない。(恵まれた環境にしながら、贅沢を言つてるとは思うんだけど……)

帰りを待っていてくれるであろう家族の面々を思い浮かべながら、康太郎は鉛さながらに重い溜息を吐く。

康太郎は鈴笠家の長男だ。しかしながら、家族の誰一人として、康太郎とは血の繋がりはない。

小学生の頃に両親が事故で亡くなり、親戚からの身請けを躊躇されている際、父の親友だった鈴笠恭平――義父が、養子として康太郎を引き取ってくれたのだ。

## タイトル

傍から見れば相当に不幸な身の上に思えるが、本人は極めて恵まれた人生を歩んでいると思っている。恭平は実の息子同然に可愛がってくれたし、義母となった女性も新たにできた二人の姉も、康太郎をかけがえのない家族の一員として接してくれた。それ故に、康太郎は恥ずかしがることもなければ臆することもなく、世界で最も大切なものは家族だと言いつける。

大恩ある義父は康太郎が高校生の頃に亡くなったが、義父の教訓や思い出は今もこの胸の奥で生き続けていた。

(父さんのためにも、今日こそ帰らなくちゃ)

ある理由から実家に戻る日程を先延ばしにし、大学に入ってから一度も帰っていないという不義理を働いていたので、いつまでも躊躇しているわけにもいかない。

康太郎が帰ってくることを見越しているためだろう。来客に照らされる玄関脇の照明が、あらかじめ煌々と輝いているのを鑑みるに、義母と義姉が康太郎の帰宅を心待ちにしているのは想像に難くない。

(……よし)

扉の前で大きく深呼吸を繰り返し、リラックスと平静を体内に行き渡らせる。意を決してインターホンを強く押し込んだ。

「おかえりなさい、康ちゃんっ」

懐かしいレトロな呼び鈴が鳴り終えるよりも早く、玄関の扉がバンツ——と、勢いよく開け放たれた。完全に虚を衝かれる形となった康太郎が「うわっ」と短い悲鳴を上げるが、扉を開けた人物はそんなものを意に介さず正面から抱きついてくる。

「本当に久しぶりね。康ちゃんをお出迎えするために、ずっと待っていたのよ」

「ああ、うん……ごめんね、母さん。帰ってくるのが遅れちゃって」

上がり框にスリッパと並んで場違いなスマートフォンが転がっているのから察するに、本当に康太郎といの一番に顔を合わせるべく腰を降ろして待機していたのだろう。

驚愕から立ち直った康太郎が小さく謝ると、妙齢ながらもとても可愛らしい義母——鈴笠<sup>やよい</sup>弥生は慈愛を宿した笑みを咲かせた。

（数ヶ月ぶりに会ったけれど……やっぱり、母さんは若く見える）

帰郷を心から喜んでくれる優しい義母を、康太郎は間近で眺める。血は繋がっていないとはいえ、弥生と康太郎の年齢差は実際の親子と比べてもそう変わりはない。

大学一年生となった康太郎は十九歳であり、母である弥生は三十八歳なのだが、その容姿はどれだけ厳しく見ても三十路前後が精々だ。事実、康太郎が高校生だった頃は、一緒に外に出ると姉弟と間違えられることも珍しくなく、親子だと判明すると大

## タイトル

層驚かれたものだ。

結わえられた黒髪は艶やかな光沢を放ち、柔和な微笑みを形作る桃色の唇は、リップクリームを引かなくとも瑞々しい。ちよっとしたモデル程度では太刀打ちできない整った顔立ちに加え、本人が華美なメイクを好まないこともあり、余計に若々しさに拍車をかけていた。

「少し痩せたんじゃない？ ちゃんとご飯食べてる？」

「わっ——か、母さんっ」

弥生が康太郎の肉付きを確かめるべく背中を撫で回し、腕を奥へと伸ばして身体を密着させてくる。付随して、義母の温かで柔らかな膨らみが康太郎の腹部へと押しつけられた。

（母さんのふわふわしたおっぱいが、僕の身体で潰れて……）

年齢より遙かに若く見られるとはいっても、弥生の肉付きはれっきとした三十八歳の熟女のものだ。ゆっくりと醸成された義母の女体は、まるやかな柔肉で覆われている。背中に這う指から重なり合う二の腕まで、触れ合う箇所すべてから甘やかな官能が伝播してきた。

特に、家族の中で最も豊富なGカップの巨乳は、柔らかな暴威といっても差しつか

えない。ブラのカップでしっかりと巨乳を支えているとはいえ、康太郎と密着しているの、至近距離からデコルテが覗き放題となってしまうている。

麻糸で編まれた通気性に優れたシャツの内側で、白い乳肌が淫らな溪谷を絶え間なく形を変えさせており、康太郎の視線を一手に吸い付けてしまう。

(母さんのいい匂いが……)

屋内は空調が効いていても、この時期は身体が自然と汗をかき。密着した弥生から甘やかな香りが立ち上り、揮発した汗に混じって康太郎の鼻を無頓着に愛撫した。

一嗅ぎするだけで視界が甘いモザイクに浸蝕され、平衡感覚がぐらりと揺らぐ。心臓が大きく脈を打ち、肺胞が肥大したかと錯覚するほど胸囲が大きく膨らんだ。

「や、瘦せたんじゃないやなくて身体が引き締まったんだよ。大学までは自転車で行くし、痛みやすい野菜とか肉とか買いに頻繁に外に出かけるから……」

「言われてみれば、肩とか背中とかカチカチね。身体つきもがっちりしてきたし……ふふ、康ちゃんも大人の男の人になってきたって感じがする」

息子の成長ぶりを確かめるように、僧帽筋から肩甲骨を下り、背筋に沿って義母の柔らかな指が圧迫してくる。もともと、年上とはいえ女の力では指圧などたかが知れるので、感覚としてはくすぐったいだけだ。

## タイトル

(大きなおっぱいが、身体を擦って……)

しかし、乳房の感触はくすぐったいでは済まない。指が背を伝うに従い、弥生の身体も徐々に降下していく。三十八歳の柔らかな丸みが半球を崩しながら擦りつけられ、男の身体に甘美な感触を撫で付けていく。

身体が心地良さに喘ぐうとするものの、康太郎は後ろに回した拳を爪が掌にめり込むほど握ることで耐え忍んだ。

「あっ、康君。帰ってきたのね」

表情は変えることなく無言の我慢を重ねていると、リビングに通じている扉が開き、一人の美女が上半身だけひよこりと姿を現す。

「た、ただいま、姉さん」

康太郎が弥生の頭越しに挨拶をすると、細長い棒アイスを手にした義姉——鈴笠摩耶は「ん」と、舌先でアイスをちろりと舐め小さく頷く。

「もう、摩耶ちゃんたら。もうじき晩ご飯なのにそんなもの食べて」

「今日一日仕事をしてきた、自分へのささやかなご褒美よ」

不規則な間食を目にした弥生が、娘を咎めるべくようやく康太郎の拘束を解いて踵を返す。母の柔らかな感触と甘い匂いが遠ざかり、康太郎は胸中で大きく安堵した。

(姉さん、昔からずっと母さんと仲がいいな)

アイスを奪おうと弥生が手を伸ばすも、康太郎と背丈がさほど変わらず170センチに迫る長身の美女は、腕を高々と伸ばして義母を翻弄する。

エノコログサ<sup>編</sup>で野良猫をあやすように、摩耶が弥生をからかっているのを見ると、我が家に帰ってきた実感が急速に膨れあがってきた。

義姉である摩耶は、今年で二十六歳になる。三十八歳の母親とは一回りしか年齢が違わないのは、摩耶は義父である恭平の実子だが弥生は継母だからに他ならない。

両者の年齢差は母と娘というより年の離れた姉妹といった具合だが、二人の親子関係はとても良好だ。ややマイペース気味の摩耶と何事にもおっとりとしている弥生は、康太郎と同じく血は繋がってはいないものの、実の母娘となら変わりない。

もともと、どちらかといえば摩耶が弥生を振り回していることが多いため、どちらが親子かよくわからなくなる時があるが――。

(それにしても……相変わらず外と内の差が激しい格好をしているな)

長身を活かし、背伸びをして弥生からアイスを逃がしている義姉だが、これでもれっきとした社会人だ。外に出る際は女の身嗜みとしてシワ一つ無いスーツに身を包み、土埃一つ被っていないパンプスを履いて凛々しく出社していく。

## タイトル

ところが、外に出て行く時とは別人かと思うほど、自宅にいる時はラフな格好をしている。弥生はスカイブルーの涼しげな麻シャツに薄手のスカンツを穿き、部屋着にふさわしい格好をしているが摩耶はまるで違う。

サイズを間違えたとか思えない丈の長いタンクトップに、ふとももどころか臀肉の一部がはみ出す際どいホットパンツを穿いていた。タンクトップの前面にはスベルの間違った英文がプリントされており、暑いためか裾を脇に結んで臍を丸出しにしている。

有名な商社に勤めている摩耶だが、この姿からではキャリアアーマンにはとても見えない。社交性の高い義姉が友人、知り合いとは極力外で会い、滅多に家へ招こうとしないのは、この裏の顔とも言うべきものを秘匿するためだろう。

「もう、わかったわよ。お母さんったら頑固なんだから」

弥生の執拗な没収に根負けした摩耶が、降参とばかりに両手を挙げ「康君」と呼びかけながら近づいてくる。素足が汗ばんでいるのだろう。摩耶が白い足指を床から離す度、ぺたぺたと湿った登音が鳴らされた。

まだ靴を脱いでなかった康太郎を上がり框から見下ろしながら「はい」と摩耶がアイスを差し出す。

「外、暑かったでしょ。もう口付けちゃったし、康君にあげる」  
「えっ——でも……んぐっ」

辞退しようとする康太郎だったが、摩耶は耳を貸すまでもなく溶けかけた棒アイス  
を口内に差し込んだ。舌の上を滑り頬の裏に突き刺さった氷菓子が、うだるような暑  
さを忘れさせる鮮烈な冷たさと、爽やかなバニラの香りを口内に染み渡らせる。

（姉さんの涎がついたアイスが……）

しかし、康太郎の意識を席卷していたのは、クリームの味でもなければ脳髓を締め  
付ける冷たさでもない。アイスの表面にべったりと付着していた義姉の涎を口に含ん  
でしまったという、途方もない動揺だった。

（姉さんは、あまりにも美人過ぎる）

茶目っ気を含んだ微笑みを零す、血の繋がらない姉。

柔和で優しい義母とは異なり、摩耶は切れ長の双眸に不思議な妖しさを宿してい  
る。メイクを落としているはずなのに紅の唇は瑞々しく艶めき、瞼の上を走る柳眉は  
美しい弧を描く。

## タイトル

肩にかかった黒く輝くセミショートヘアは左側が僅かに長いアシンメトリとなっ  
ており、緻密にデザインされたヘアスタイルは暗に知的な雰囲気醸し出す。

家族の中では最も美しい義姉だけに、美人という言葉の定義として、これほど適切  
な人物はいないのでないかと、康太郎は常々思う。

（プロポーションだって完璧過ぎる）

秀麗な顔立ちのみならず、摩耶の身体つきは何処にピントを絞っても非の打ちどこ  
ろがない。タンクトップはおろかスーツを着ていても明確に見て取れるFカップの膨  
らみに、水蜜桃を彷彿とさせるなめらかな艶臀。

蜂の如く括れた柳腰としなやかに伸ばされた二十六歳の美脚は、その日本人離れし  
た長さもあってレスクインだろうと容易には太刀打ちできない。

商社勤めの摩耶だが、グラビアアイドルだと職を偽っても何の違和感もないほどに、  
単なるオフィスレディ以上の魅力に溢れかえっている。

ラブを通り越して自堕落にしか見えない摩耶の私服が、一切の醜悪と無縁でいられ  
るのは、ひとえに贅肉一つないスタイルによるものだ。

「ちよっと見ない間にイメージが変わったわね。身体つきも前とは、こう……」

「んんっ、んーっ」

義母と同じく僅かな成長も見逃さない義姉は、義弟の身体を遠慮なくまさぐってく  
る。制止を求める康太郎だったが、アイスを啜え込まされているので、抗議はもとよ

りまともに発声すらできない。

(目の毒過ぎる……姉さんのおっぱいがこんなに近くで揺れて……)

ただでさえ緩い服なのに、相手が義弟なので警戒心すら抱いていないのだろう。摩耶が僅かに屈んだだけで、タンクトップのルーズに開いた胸元からは白くふくよかな谷間だけではなく、白いブラまで丸見えとなる。

(ショーツだって見えて……)

豊かな美乳を官能的に網膜で弾ませるだけでは飽き足らず、康太郎を横からのぞき込もうとした女体は、ずれたホットパンツから同色のショーツを垣間見せていた。

至近距離まで迫ってきた二十六歳の女体からは、義母とはまた趣の異なる甘い香りが立ち上り、康太郎の鼓動をにわか高鳴らせる。

(母さんも姉さんも、僕をかけがえのない家族として見てくれているのに……)

義母も義姉も、養子として迎え入れてくれた頃から、何一つ変わらずに接してくれている。康太郎を鈴笠家の男子として見てくれ、大学生となった今でも大切に可愛がってくれる。

(父さんに頼まれたのに、僕は……)

## タイトル

鈴笠家の女達が康太郎を家族として扱ってくれるのに、康太郎だけは義母や義姉を

女としても見てしまっている。彼女達が近づくだけで自然と鼓動が速まり、女体の隅々から欲情を焚きつけられてしまう。

育ての親達に恩を仇で返している自分の醜い衝動に耐えられず、康太郎は地元の大学ではなく、一人暮らしをせざるを得ない隣の大学へと進学した。真意を知らない弥生と摩耶は悄然としながらも、康太郎の意思を尊重してくれた。

初めての一人暮らしで何もかもが手探りの連続に難渋し、誰もいない食卓で独りご飯を食べるのは、酷く寂しかった。それでも、家族に肉欲を抱くという苦悶の背徳から解放された生活は、禁忌の罪悪感を薄れさせてくれる。

愛する家族に会いたいのが、愛する家族に性欲を抱きたくない——康太郎の帰郷に伴う複雑な葛藤には、このような経緯が存在していた。

(どれだけ意識しないようにしても、やっぱりダメだ)

義母と義姉の悩ましい肢体が視界に映り、家族としてごく当たり前のスキンシップがなされるごとに、身体の奥から狂おしいまでの衝動がこみ上げてくる。

この数ヶ月、息を潜めていた獣の衝動が迫り上がり、呼気に乱れが生じ、股間に向かつて禍々しさを帯びた血が流れ込んでいく。暑さに茹だるようにして下垂していた逸物が、ズボンの中でびくりと邪な痙攣を生じさせた。陰囊が甘やかに疼き、ズル剥



けとなつてゐる亀頭がむくむくと劣情に肥大していく。

(あつ——)

トン——と、廊下から静かな足音が弾んだ。義姉の肩を越えた視線が義母の背後へと向けられる。階段から降りてきた一人の美少女が康太郎の網膜に像を結んだ。

鈴笠家に住む、三人目の住人。弥生の実子にして、摩耶と半分だけ血を分けた妹。

そして、康太郎が一番側にいた、もう一人の義姉。

「花蓮——」

僅かな躊躇を含み、康太郎はたった十日しか歳の離れていない次姉の名を紡いだ。

(最後に見た時より……ずっと可愛くなつてる)

同年齢の姉弟として、康太郎は花蓮ともっとも顔を合わせていた。それにもかかわらず花蓮の名前がすぐに出てこなかったのは、次姉の容姿が大きく記憶と食い違つていたからに他ならない。

母親譲りの愛らしい容姿と繊細な柔肌の持ち主なれど、女子高生だった頃の花蓮は水泳部のエースを務めていただけあつて、毎年夏ともなれば小麦色に肌を焼いていた。

しなやかな黒髪は泳ぎの邪魔になるという理由だけでぱつぱりと断ち、私服のパンツルックは一見して男子と区別が付けられなかった、ベリーショートヘアの女子高生。

## タイトル

青春を部活動に捧げたせいで浮いた話一つすらなく、容姿は優れているのに女としての魅力が著しく希薄だった「かれん」という響きに名前負けしていた少女。

それが、女子大生となつた今では、劇的な変貌を遂げていた。

(高校の後輩どころか、同級生が見てもすぐにはわからないよ)

中性的な印象を与えていた短い黒髪は、三年生の退部を機に伸ばされ、肩から流れるセミロングヘアとなつて、一目で乙女とわかるようになっていた。プールに溶存する塩素の影響によつて、ブリーチをかけたように薄茶色になつていた髪は、キューテイクルが蘇り美しい光沢を放つていた。

元になる下地はあれど、スイミングによつて満遍なく鍛えられていた女子大生の肢体はしなやかに育ち、日射に焼かれていない肌は生来の雪肌を取り戻している。

涼感の溢れる水色のジョーゼットブラウスと白いミニスカートが、より十九歳の少女の魅力を引き立てていた。

(花蓮が……こんな綺麗になつてゐるなんて)

優しくたおやかな母性を醸し出す弥生や、モデルも羨む秀麗な顔立ちとスタイルを持つ摩耶とも異なる、瑞々しい可愛らしさ。名前の通りに可憐な美少女へと生まれ変わった女子大生——。

そんな次姉に、康太郎は思わず見とれてしまう。

「康——」

かすかなつぶやきが耳に届いたのか。花蓮が懐かしい愛称を口にし、康太郎を真正面から捉える。

「バカッ！　なんでこんなに帰りが遅くなってるのよっ！」

突如として玄関に響き渡った怒声が、理性を曇らせていた欲情を一瞬でかき消し、康太郎の背筋がピンと伸ばされる。義母と義姉は何故花蓮が憤慨しているのかわからないらしく、目を白黒させていた。

「世界の最果てに住んでるわけじゃないでしょ。帰ってくるならもっと明るいうちに戻りなさいよっ」

「ご、ごめん。つい、家を出るのが遅くなっちゃって……」

犯人を追及する名探偵のように、胸を張った花蓮が勢い良く人差し指を康太郎に突きつける。

次姉の言うとおり、隣県に住んでいるとはいえ斎美駅から電車で向かえば一時間程度で帰郷できるので。母姉達には会いたいけれど会いたくないという矛盾に葛藤し、出発が遅れに遅れてしまっただけに、花蓮の氣勢に呑まれた康太郎はまごつきながら

## タイトル

言い訳する。

「だったら連絡くらいちゃんといれなさいよ。ママとお姉ちゃんがどれだけ心配したと思ってるのっ！」

しかも実家への戻り辛さから一度斎美駅周辺をふらふらし、あらかじめ伝えていた帰着時間を過ぎてしまったのだ。後ろめたい思いがあるだけに、康太郎は無言で花蓮からの叱責に甘んじる。

「あの、花蓮ちゃん？　私は康ちゃんの心配なんてしてないわよ」

正論をぶち上げ我が意を得たりとばかりにふんぞり返っていた花蓮だが、弥生からの異論に「えっ」と素っ頓狂な声を上げた。

「私だっしてないわよ。小中学生ならともかく、康君はもう大学生じゃない」

追い打ちとばかりに摩耶からもあっさり同意を拒否され、花蓮は「うっ」と康太郎を射貫いていた人差し指を折る。

「大体、お昼に来る予定だったけれど遅れるから到着は夜になりそうって、摩耶ちゃんが教えてくれたでしょう？」

「えっ——な、何それ？　わ、私そんなの知らないんだけれど……」

弥生の言うとおり、遅れる旨は直前までSNSで遣り取り取っていた摩耶に伝えてあ

った。当然、事情は家族全員に共有されているはずだが、花蓮だけは知らなかったらしい。当初の到着予定の変更について怒っているのだと思っていたが、どうやら花蓮だけは康太郎が立派から数時間経っても来ないと誤解していたようだ。いきなり烈火の如く怒鳴りつけてきたわけもようやく納得がいく。

「お、お姉ちゃん、なんで私に教えてくれなかったの」

「ごめん。うっかり伝え忘れていた」

自分だけが怒りを空回りさせていると知った花蓮から、急速に怒気が霧散し始め、康太郎を見据えていた双眸が気まづげに逍遙する。威勢良く突き出されていた指先も、筋違いの早合点だとわかり、萎びたもやしのようにへにやりと曲がった。

摩耶を責めようにも、忘れていたと謝られたらそれ以上の追及は辛い。振り上げた拳の降ろしどころを見失い、花蓮は見ていて気の毒になるほど右往左往した。

「花蓮ちゃんったら、そんなに康ちゃんが心配だったのね」

「な——何言ってるのよ！　なんで私が康のことなんて……」

そんな花蓮に助け船を出す形で弥生が介入してくるが、あいにくとその竜骨は中央からへし折れている。およそ、故意の悪意によって降りかかる被害よりも、無意識の善意によって生じる災禍の方がはるかに性質が悪い。

## タイトル

母親から褒め殺しにされた美娘は言葉を失う代わりに頬を紅潮させていく。

「わ、私はただ、ママとお姉ちゃんが心配していると思っただから——」

「だから、心配してないって。自分が康君のこと心配で心配で堪らなかったのに、私とお母さんに自分の心情を託けるやり方は感心しないわね」

焦った言い訳が藪蛇となり、花蓮は摩耶からも逃げ道をふさがれる。

「花蓮ちゃんがお昼過ぎてからなんだかそわそわしていたのは、そういう理由だったのね。やつぱり弟思いの良い子だわ」

八方塞がりとなった花蓮に、とどめとばかりに弥生が船底に大穴を開けた。無論、弥生としては本心から言ってるだけに、この羞恥は強烈過ぎる。女子大生は桜唇を何度か声を出さずに開閉させると、耳元まで林檎のように紅く染め上げていった。

「あのさ、花蓮——」

いたたまれなくなつた康太郎がおずおずと呼びかけると、「うるさいっ、バカアツ」と花蓮は一鳴きし、踵を返して脱兎の如く階段をかけ上がる。階下まで響く足音が扉の閉まる音と共に途切れると「あらあら」と弥生が頬に手を当てた。

「花蓮ちゃんたら、どうしてそんなに恥ずかしがるのかしら。姉弟仲が良いことは悪いことじゃないのに」

この間まで女子高生だった娘の心情をいまいち汲み取れない義母が、不思議でならないとばかりに首をひねる。

「あの子、普段はまともだけれど、康君相手にお姉さんぶろうとすると、いつも墓穴掘ったあげくに自分から埋まってしまうのよね」

「まあ、そんなところが可愛いんだけど」と、妹の弄りどころを熟知している二十歳の美姉は、くすくすとおかしげに喉を震わせる。そもそも、オフイスレディとしてキャリアの道を歩んでいる摩耶が花蓮への言づてを忘れるなど怪しいものだ。

真面目な顔して妹弟の感情を弄ぶ悪癖のある長姉だけに、花蓮が摩耶の掌で踊らされた可能性は充分にある。

(まあ、でも…：怪我の功名みたいだけれど、姉さんには感謝しなくちゃ)

端から見れば、康太郎だけが罵声を浴びたので怒られ損をしているように見える。

しかし、花蓮が容赦なく怒りをぶつけてきてくれたおかげで、腹の底でくすぶっていた淫らで卑しい欲望が、一時的にだが綺麗に一掃されてしまった。

火事を爆風で消し飛ばすが如き荒業だが、義母と義姉を女として見てしまう後ろめたさと比べれば断然マシだ。

無茶なやり方だが、あの頬を叩くような怒声が耳に残っていれば、淫らな感情を抱

## タイトル

いても相殺できる。

「さあ、もうすぐご飯だから先にお風呂で汗だけ流してきちやいなさい」

「う、うん。でも、花蓮は…」

怒りをぶつけられた康太郎はノーダメージどころか助けられた形になったが、自爆した花蓮は今頃ベッドの上で身悶えし、枕に八つ当たりしているに違いない。過去、義弟として同類の光景を見てきただけに、次姉の行動が容易に読める。

何かフオローの一つでもしようとする康太郎に「平気よ」と、摩耶が言葉を挟んだ。「あの子、燃費が悪いもの。お腹が空くのに耐えられなくて、どうせすぐに降りてくるわ。ほら、早く入ってきなさい」

弥生に促され摩耶に急ぎ立てられ、言われるままに靴を脱いだ康太郎は、汗ばんでいた身体を湯船に沈めた。

頭からざばざばと湯を浴び、髪が生乾きのままダイニングに赴くと、食卓には柳眉を曲げた次姉がバツが悪そうに唇を尖らせて着席していた。

窓硝子に透けた入道雲が濛々と碧空に浮かび、焼け付く陽光に押されて彼方へと流れていく。二十四時間にわたってエアコンの駆動する音が室内に響き渡る最中、クマゼミとアブラゼミとミンミンゼミが、まるで対抗するように苛烈な三重奏を路上で弾き流していた。

「暇だ……何もやることがない」

実家に帰省してから早三日——エアコンが冷風を送り込んでみてもじつとりと汗ばむ自室で、康太郎は誰に聞かせることなくぼんやりと呟いた。

一人暮らしをするにあたり生活に必要なものはすべて移し、逆に不要なものをばっさり処分してしまったため、自室は随分とがらんとしている。

## タイトル

(こういう時に限って、折原はおるか東堂すら捕まらない)

せっかく帰郷したので地元の元同級生や後輩に声をかけてみたものの、狙い澄ましたように相手の都合が空いていない。

家が退屈なら外に出るしかないのだが、生憎とアスファルトに陽炎が揺らめく炎天下にあって、目的意識もなく外に出かける気にもならなかった。

(母さん達がいれば、良くも悪くも暇なんかなくなるんだけど)

初日だけは弥生や摩耶が触れてきたが、翌日以降は「汗でべたべたするから」と、この季節にだけ通用する言い訳をすると、二人とも自省してくれた。後は話す時は意図的に距離を取り、優れた女体から目を逸らし、鉄の意志で相手の瞳だけを見続ければ、禁忌の劣情は幾分コントロールが効いた。

何ヶ月も一人暮らしをしていたため、理性が働いていれば大切な家族とのコミュニケーションはとて貴重で楽しいものだ。もともと、康太郎は夏休みだが、社会人である摩耶は働きに出ているので、日中はほとんどいない。弥生も少々特殊な仕事柄、昼間は家を空けがちだ。

唯一、女子大生の花蓮だけは康太郎と同じく夏期休暇中だが、社交性の高い次姉は頻繁に出かけている。今日はOGとして母校の後輩達に指導を行うついでに、一緒に

食事もしてくるらしく、夜まで帰ってこない。

（家の手伝いくらい許してくれたら、食事の支度や草筆りでもしているのに……）

せっかく実家に帰ってきたのだからささやかな親孝行でもしようとしたものの、息子の食事を準備するのは母としての喜びらしく、弥生から頑として拒まれてしまう。

庭に繁茂した雑草にしても、数日もしないうちに業者が来て刈り取る算段となっていたので、素人の康太郎が手を付けても意味がない。

仕方ないので絨毯に寝転び、スマートフォンを漫然たる瞳で見つめながら暇つぶしのゲームに耽っていた。

（待てよ……いつもは大学だけけど、平日のこの時間帯なら……）

時刻の確認のためにホーム画面を映し出していた康太郎は、ゲームを中断して素早く画面を切り替えると、一つのフォルダを開きアプリをタップした。

『こんにちは、午後二時になりました。とっても暑い日が続きますが、今日も元気にいきましようね』

アプリが起動すると、軽快なBGMと共にFMラジオの番組名が読み上げられた。聞き慣れた柔らかな女の声が目につく、思わず頬が綻ぶ。

（母さんのラジオ聞くの、久しぶりだ）

## タイトル

ゲームを中断した康太郎は、義母の美声を高音質で聞き取るべくイヤホンを耳孔に据え、じっくりと聞き入った。

弥生が斎美市のFM局でラジオのパーソナリティーを務め始めて、もう十年近くになる。ラジオのパーソナリティーといえば、明朗かつメリハリのきいた声でトークをするイメージが強いが、こと弥生においてそれは当てはまらない。

滑舌そのものは非常に良く、どれだけテンションが高くなっても聞き取れる発声をしているが、義母の声質はとてやわらかでふんわりとしている。

弥生が高校生だった頃は、所属していた演劇部においてもその声はとも目立っていたらしく、顧問から「演技はいいけど、声は特筆に値する」と評されたらしい。大きな学校行事の際には、放送部の助っ人として進行を任されていたというのだから、弥生の声は万人に認められる優れた素質を秘めていたことがわかる。

ラジオの仕事にしても、高校時代から付き合いのあった人物から臨時で頼まれたら予想以上に好評を得てしまい、それからずっと続いているという状況だった。

（優しくて温かいんだよね……母さんの声って）

話し方が優しい——という、表層的な響きではない。ただ、声を聞いているだけで心も身体もリラックスしてしまう、不思議な性質を義母の声は帯びている。

(姉さんはヒーリングボイスって言っていたけれど、言い得て妙だ)

弥生の番組は、リスナーからの手紙を読み上げ、返答し、音楽を流すという、ありふれた内容だ。それでも、フリーのラジオパーソナリティーとして十年の実績があり、横の繋がりからアナウンスやMCの仕事が舞い込んでくるのだから、確かな人気があるのだろう。

(母さんの声を聞いていたら、なんだか眠くなってきた)

一時間ほど前に昼ご飯を食べたからだろう。弥生の柔らかな声でリラックスしてきたこともあってか、抗いがたい睡魔が意識を覆い出す。

(まあ……いいか。どうせ、誰もいないんだから……)

やることもないのだから、たまには昼寝をしたって罰は当たらないだろう。怠惰を見咎める者も不在ということもあってか、康太郎は弥生の声を子守歌にしてゆっくりと目を閉じ、静かに意識を夢の中へと溶かしていった。

## タイトル

蒼い空が茜色に染め上げられ、窓枠に切り取られた西日が室内に差し込んでいる。

(……ああ、そうか。寝ていたんだっけ)

焦点の拡散した混沌とした視界を知覚し、微睡みの中に溶け込んでいる意識が目覚めます。もつとも、まだ意識は無形の夢にどっぷりと浸かっており、現実との区別が明確についていない。

統合されうるべき感覚が散逸しており、一つに収束するべき自我が離散している。

(いいや……こんな気持ちいいんだ……まだ起きたくない)

赤い陽光が起床を促してくるが、頬に生じている温かで柔らかな感覚が覚醒の邪魔をする。すべすべとして、それでいて極上の絹を彷彿とさせる繊細な柔らかさが、肌を幸福に溶かしていった。

(なんだろう……とてもいい匂いがする)

頬を緩ませる素晴らしい感触もさることながら、とてもしっとりとした甘い匂いが鼻孔をくすぐる。胸いっぱい吸い込むだけで、身体からじんわりとした官能が想起させられる穏やかな香り。

ただ、呼吸をしているだけで、安らぎと幸せがこみ上げてくる優しい匂い。それが、何処かで堪能したものだど気付き、無意識が自然に記憶を洗い出していく。

「ママ……」

花でもなく、食べ物でもなく、アロマでもない。

母親に優しく抱かれた時に感じた、あの懐かしくも切ない匂いに包まれ、康太郎は幼い頃を夢想しながら思い出の中に在る母を呼ぶ。

「あら、目が覚めた？」

「……えっ——か、母さんっ？」

幻の中の母親に呼びかけた声、現実の応答となって返ってくる。あり得るはずのない矛盾が生じ、拡散していた意識が現実を捉えるべく収束した。

「う、わっ——な、なんでっ——」

混沌としていた視界へ急速に焦点が合わせられた途端、十年以上一緒に過ごしてきた義母の穏やかな顔が天井と共に映り込む。頬に触れていたものが自室の絨毯ではなく、膝枕にされていた弥生のふとももだとわかり、咄嗟に康太郎は跳ね起きる。

もつとも、意識は現実へ戻っていても、身体はまだ微睡みに侵されている。血液すら正常に巡っていないのだから、いきなり立ち上がるなど無謀も甚だしい。

上体を起こしたまでは良かったものの、足を踏ん張らせることができず、たちまち康太郎は派手に転倒した。幸い、真後ろに倒れたおかげで、後頭部は弥生の膝枕へと落ちる。ふわふわとしたふとももが優しく沈み込み、康太郎は怪我どころか痛み一つ生じることなく後頭部をバウンドさせた。

## タイトル

「そんな焦らなくても大丈夫よ。ちゃんと身体が動くようになるまで、このままでいいから。ね？」

再度立ち上がろうとしたところで、視界に弥生の掌が翳され康太郎の周章を諫める。四肢もきちんと動かないまま立ち上がったら、自分だけではなく弥生を巻き添えにする可能性もあった。弥生に迷惑をかけないためにも、康太郎は言われるままに義母のふとももを枕にして身体を横たえる。

康太郎が言うことを聞くと、弥生が「よしよし」と頭を撫でた。正直、大学生にもなつて頭を撫でられるなど羞恥以外のなものでもない。

(おまけに「ママ」って口走ったのを聞かれたし……)

この年になって母親に甘えたがっていると思われていたら、それこそ身悶えするほど恥ずかしい。かといって、言い訳をしたら怪しさを裏打ちするだけなので、何もいえない。

結局、康太郎はただ義母の愛撫に身を任せ、胸中で羞恥に苦悶するしかなかった。

「勝手にお部屋へ入っちゃってごめんね。呼びかけても康ちゃんのお返事がなかったから、つい……」

「ああ……ごめん、母さん。心配させて」



そもそも、何故自室に義母がいるのかという根本的な疑問を失念していたが、康太郎が応答していなかったのならやむを得ない。義父——弥生の夫は、普段と変わらぬまま寝入り、そのまま心不全で急逝している。そのため、弥生は寝て起きたらまた自分の大切な家族が亡くなっているのではないかと、一時期は随分と恐怖に駆られていたものだ。

(僕がちゃんと目を覚ますのか、気になったんだろうな)

義父の死は不運としか言いようがない。頭ではわかっているけど、康太郎の寝姿にどうしても懸念を覚えてしまい、起きるまで付き添いたかったのだ。

(ただ……膝枕はちよつと過保護すぎる気がするけれど……)

弥生としては義息子が絨毯に直に顔を付けているのが忍びなかったもので、見守りついでにふとももに乗せてくれただけなのだろう。堅い床ではなく、柔らかい脚肉を枕にして夢を見て欲しかったわけで、そこに悪意はない。

(母さんのふともも、なんて温かくてふわふわしてるんだ)

しかしながら、康太郎にとつて弥生の膝枕は一種の魔境に等しい。未亡人のふとももは、三十八歳という女としての爛熟期にさしかかっていることもあり、二人の娘達よりも数段むっちりとした肉付きをしている。その熟れた柔らかさは、どんな素晴ら

## タイトル

しい枕だろうと敵わない、極上の寝心地を提供してくれていた。

(さらさらしたパンストが、頬をくすぐって気持ちいい)

ラジオ局から戻ってから、まだ着替えていないらしい。弥生は気楽な部屋着ではなく、メイクも含めてばっちりとアウト用ファッションをしている。

凶悪な紫外線から肌を守る、長袖の白いブラウス。夏らしく涼しげな檸檬色のミニスカート。夏に合わせた透明感のあるヌードベージュのパンティストッキングが、美熟女の脚肌を覆っていた。

頬に生じるさらりとした心地良い肌触りは、これが原因らしい。

(甘い匂い……呼吸しているだけで心臓が昂ぶってくる)

外に出ている香りもあり、香水を付けたのだろう。水気たっぷりに熟れた果実が表皮から官能の香りを醸し出すように、優しく穏やかな義母から鼻を蕩かせるなめらかな媚香が湧き上がっていた。

緩やかだった心音が徐々に大きくなり、康太郎の鼓膜をリズムカルに揺らしていく。(なるべく早く母さんと離れないと……ああ、でも、もう少しだけ……)

弥生と密着してしまっていることもあり、康太郎の身体は徐々に美熟女の色艶にあてられている。きちんと覚醒していたら、欲望を振り払って弥生との距離を強引にで

も取っただろう。

しかし、自然な覚醒ではなく弥生の存在に驚いて跳ね起きたためか、意識はまだ霧のかかったようにふらふらとしており、理性も緩くなってしまうている。

その間隙を縫って、魅惑の感触と匂いが牡の本能を悩ましく魅了した。

「さっき携帯をチラッと見たんだけど……私の番組を聴いていたの？」

「う、うん。昼間は大学あるし、なかなか聞く機会がないから……でも、途中で眠っちゃったみたいで……あ、いや、つまらないってわけじゃないから」

義母の匂い立つ色気に誘導され、康太郎は正直にこれまでの顛末を話す。もちろん、大好きな弥生のためにも、トークが退屈だから睡眠に襲われたわけではないと念を押すのは忘れない。

「ふふ、大丈夫。私の声を聞くとリラククスし過ぎて眠くなっちゃうって、昔からみんなに言われているから」

唯一無比と言っても過言ではない、柔らかな声質を持つ義母。身内であり、十年以上に渡って聞き続けた康太郎ですら特徴的な声だと思いのだから、周囲の人間が同じ感想を抱くのはある意味当然なのかもしれない。

義息子の言いたいことは全部わかっているとばかりに、義美母は優しく微笑んだ。

## タイトル

「大学生になっても聞いていてくれるなんて嬉しい。ありがとう、康ちゃん」

大切な息子がリスナーでいてくれるのは、仕事のモチベーションに直結するのだろう。康太郎をそっと覗き込む美熟女が、感謝の言葉を囁きに溶かした。

（母さんは姉さん並にエロい身体つきだけれど……一番エロいのは声だ）

三十八歳の熟女でありながら可愛い美しさを咲かせ、美人揃いの鈴笠家において最も豊かな乳房を持つ義母。経産婦らしい大きな熟臀に、ミニスカートから大胆に露出する艶脂を含んだむっちりとした媚脚。

そのどれよりも、弥生の声は女としてのエロテイシズムを孕んでいる。

（ラジオから聞こえてくる声も充分美声なんだけれど、生の声は格別だ）

電波に変換される過程で削ぎ落とされる、湿潤を帯びたなめらかな美声。声帯を震わし、しっとりとした桃色の唇から紡がれる義母の生声は、単に優しさだけを秘めているわけではない。

偉大な芸術として描かれた裸婦画が必ずエロティックな側面を宿しているように、弥生の優美な声はその音調の在り方次第で、ぞくりと背筋が痺れる妖声となる。

特に、囁くような小さな声になると、あの優しく淑やかな声の持ち主とは別人と思わずにはいられないほど、セクシーボイスへと変容した。

(耳の内側を舐められて、意識が犯されていくみたいだ)

男ならすれ違いざまに振り返らせるだけの美貌を持った、長姉の摩耶。

今や見た目だけならば名前の響き通りの美少女となった、次女の花蓮。

その二人が束になっても敵わない、生まれ持った資質によって紡ぎ出される義母の美声。摩耶と花蓮とは違い、耳にするだけで牡の情欲を唆す魔性を帯びた艶声が、弥生の白い喉から紡がれる。

(うう…：まずい、ち×ぽが一気に膨らんで…：)

美熟したふとももの柔らかさ。パンティストッキングの官能的なさわり心地。甘く華やかな未亡人の匂い――。

これだけでも充分蠱惑に値するというのに、数多のリスナーを魅了する美声が手を伸ばせば届く距離から浴びせられ、若い大学生の性欲が無頓着でいらられるはずがない。鼓動の昂ぶりは淫らな熱へと変わり、獣の衝動が股間に集約されて陰茎を疼かせ、膨れ上がらせていく。夏の盛りということもあり、康太郎が部屋着として穿いていたハーフパンツは風通しが良く、布地も薄い。

甘美な微睡みに絡め取られていた理性が喫緊を告げた時には、十九歳の旺盛な勃起力は取り返しの付かない卑猥な形をハーフパンツへ浮き彫りにする。

## タイトル

「昔は花蓮よりも小さかったのに、康ちゃんも大きくなったわね。小学生の頃は、背丈なんてまだ――」

こうやって、じつくりと康太郎を見つめる機会が年を経るごとに減っていったからだろう。記憶を遡って我が子の成長を実感していた弥生は、康太郎の頭から胸板をゆつくりと眺め、腹から足に至る途中で驚愕に臉を開いた。

(しまっ――)

己の劣情を隠すか、あるいはこの場から逃げ出すか――。

足枷になっていた眠気と、甘美な僥倖をもっと味わっていたいと駄々を捏ねていた性欲に妨害され、気づいた時にはもう手遅れになっていた。

思考をする前に、浅はかな羞恥心が反射的に股間へと手を伸ばし、勃起を隠そうとする。しかし、弥生のくゆらす官能に耽溺していた身体は精確さに欠けており、股間を覆うはずだった掌を押し出してしまおう。

結果、陰茎の膨らみは形状を維持したまま横滑りさせ、卑猥な盛り上がり方を弥生の目の前で強調してしまった。

「こ、これはその…：生理現象、だから…：ち、違っただよっ」

短い昼寝程度でも朝立ちが生じるかどうかなど知らなかったが、疑問を抱くだけの

平常心など既がない。焦りと混乱が吐き出した言い訳を軸に無根拠な潔白を訴えることが、如何に胡散臭い醜態となっているかも判断できなかった。

(母さんにこんな姿を見られるなんて……)

育ての親である優しい義母に、不義理な劣情を抱いてしまう——墓まで持つて行かなくてはならない秘密を、些末な失態から最悪の形で露呈させてしまった。

どうすれば弥生に嫌われず、どうすれば弥生と正常な親子の絆を取り戻せるか、手がかりのない難題の答えを求めて無為な思考が脳裏で錯綜する。

「そう、よね……これは生理現象、よね」

「う、うんっ。そう、そうなんだ」

理路整然からほど遠い無茶苦茶な言い逃れだったが、プライドを捨てた悪足掻きが功を奏したらしい。母親に欲情する変態と罵られてもおかしくない事態だけに、弥生の解釈を康太郎は脇目も振らずに肯定する。

「うん……そうよね。康ちゃんも若い男の子だもの。私みたいなおばさんでも、エッチな気分になっておちん×んが勝手に大きくなっちゃうのよね」

「そう——ち、違うっ、そうじゃなくて——ああ、いや、母さんはおばさんなんかじゃないって意味で……だから——」

## タイトル

康太郎も弥生も、勃起を生理現象として認識しているが、そこから導き出される解釈はまったく異なっていた。決然と弥生の見解を否定しようとするも、本当は義母を女として見ていたという背徳の罪悪感が、発話に必要な舌肉をもつれさせる。

何より、美しくも愛らしい義母が自嘲するように「おばさん」と称したことに、強い忌避と憤りを抱かずにはいられない。

「だから——何なの？ 康ちゃん、きちんと教えて」

温和で柔らかで、耳を蕩かせる義母の優しい声。しかし、口調こそ穏やかなものの、康太郎を見る目つきはかつてないほどに真面目なものだ。

(もう、ダメだ。僕が性の対象にしてるって、母さんは見抜いてる……)

目線や気配のいかかわしさを追及されたなら、まだ言い逃れをする余地はある。だが、ハーフパンツの形状を変える猛々しい勃起を、間近で見せつけてしまったのだ。性に無知な幼児でもない限り、膝枕してくれる未亡人に康太郎が欲情したのだと、誰もが容易に想像できるだろう。

「ごめん、母さん……こんな優しくしてもらっているのに、ち×ぽ勃てるような息子に育っちゃって……本当にごめん……」

ここまで事態が悪化したら、もうやるべきことは一つしかない。余計な言い訳を一

切含まず、真摯に己の不徳を詫びるだけだ。

(母さん、ごめん……裏切って、ごめん……)

罪を認める声が、怯懦に震える。帰郷を懊悩していた康太郎だが、大切な家族を傷つけたくない思いが動機の根本にある。成長した長男が実は家族を女として見ていたと知ったら、最も傷つくのはこれまで信頼してくれていた義母と義姉達だ。

家族愛を裏切られたと知ったら、彼女達は悲嘆し憤慨するだろう。そうなれば信頼だけで築かれてきた家族の絆が断ち切られ、康太郎が身内の環から放逐されるのは時間の問題だ。

(母さんに嫌われたくない……母さんとこれからもずっと一緒にいたい)

この願望がどれだけ自分にとつて都合のいいものかは、康太郎とて嫌というほどわかっている。それでも、我が儘で自分勝手であっても、弥生の息子でいたいと願わずにはいられなかった。

「大丈夫。そんなに悲しそうな顔をしなくて」

これまで息子として育ててもらいながら、親としての信頼を裏切ったのだ。弥生が康太郎に向ける視線は、侮蔑と忌避しかありえない。

「母さん……どうして……」

## タイトル

それなのに、弥生の双眸はいつもの柔和な眼差しへと戻り、優しい微笑みが苦悶に苛まれる康太郎へと注がれる。

「さっきも言ったでしょう。おちん×んが勝手に大きくなってしまふのね——って」

弥生の掌が康太郎の額に置かれ、ゆっくりと頭まで慰撫してくれる。

「私は女の子しか産んでないけれど、康ちゃんだって大切な息子だもの。男の子を理解するためにも、親としてそれなりに勉強してるんだから」

「母さん……」

康太郎が養子となる前まで、鈴笠家の子供達はすべて女だった。康太郎を立派に育て上げるためにも、弥生はきちんと男の成長期における性について調べたらしい。

「人にもよるらしいけれど、康ちゃんくらいの年齢ならちよつとしたことでおちん×んが元気になっちゃうのは、珍しくないの。だから——」

康ちゃんは、私の大切な息子よ——と、弥生は穏やかに結んでくれる。その一言で、康太郎の心身に氾濫していた恐れと後悔がゆっくりと霧散していった。

(僕は本当に……幸せだ)

血の繋がった親は、もういない。けれども、親愛で繋がった弥生が、義母として共にいてくれる。恐怖で寒気すら生じていた肉体から、温かな安堵が四肢のこわばりを

解かしていく。

「ありがとう……母さん」

康太郎が心から感謝の意を告げると、可愛らしい美熟女は言葉の代わりに優しく目元を緩ませ、静かに頷いてくれる。言葉は多くなくとも、二人の間には確かに母子の絆が通っていると感じられた。

「それにしても……本当に若い男の子って、おちん×んが元気なのね」

「えっ……う、わ……」

驚きと困惑を入り混じらせながら、弥生が康太郎の股間へと視線を移す。見れば、義母を傷つけてしまったかという懸念と、身の破滅を予期した絶望に苛まれていたというのに、事の原因である怒張はまるで萎む気配がない。

弥生から無自覚に放たれるフェロモンを密着して浴びていたからなのだろうが、それにしたって少しくらいは心情に左右されても罰は当たらないだろう。

如何に男の性欲というものが制御の効かない本能と密接に結びついているかを思い知らされ、天を仰ぎたい心境だった。

「えっと……それじゃあ、おちん×んを抜き抜きして、すつきりしよっか」

「は——えっ、ちょっ——か、母さん、何をっ」

## タイトル

優しく穏やかな義母から、到底連想できない卑猥な言葉が桃色の唇から紡がれる。

それが聞き間違いではないかと疑いをかける間もなく、康太郎の股間に弥生の手がそつと添えられた。

「若い男の子が性欲をため込むのは健康にも良くないって聞いたわ。康ちゃんだって、このままおちん×んが張り詰めているのは辛いでしょう？」

「い、いや、それはそうだけれど、だからってなんで母さんがっ」

ハーフパンツを躊躇なくずり下げようとする義母の手首を、康太郎は慌てて掴んだ。

「康ちゃんは、私の手で射精させられるのはイヤ？」

「べ、別に……イヤじゃ、ないけれど……」

男根の滾りを鎮めるべく独り虚しく自慰に耽るより、密かに欲情を抱いていた義母から手淫を受けられる方がいいに決まっている。そんなものは比較の対象にすらならない。

だからといって、現実には弥生から性処理をしてもらおうにも、道徳観やら倫理観やらが劣情を頑強に抑制する。

「康ちゃんは成長期の男の子だって知っているのに、無自覚におちん×んを煽るような真似をしてしまったんですもの。親として責任を取りたいの……それでも、ダ

メ？」

弥生は少し悲しげに、不安が混じった瞳で康太郎を見つめる。

(ずるいよ母さん……僕、断れなくなるじゃないか)

康太郎にとつて、義母はもつとも大切な女だ。そんな相手を悲しませるなど、息子として許されない。弥生の性処理を拒んでいた動機は、母を苦しませないという強力無比な原則によつてあえなく粉碎された。

手首を掴んでいた指を緩めると、憂いを帯びていた美熟女の眉が嬉しげに緩む。ハーフパンツの穿き口にもぞりと指が潜り込み、ボクサーブリーフも纏めて康太郎の股座が露わとなつていく。

勃起力が強烈だったのだろう。亀頭が露出する寸前で肉竿がぐんと起き上がり、ハーフパンツが竿腹を滑り落ちる。バネ仕掛けの如くペニスが跳ねあがると弥生が「キヤツ」と小さな悲鳴を上げた。

「ああ、ビックリした。小学生の頃に見たきりだったけれど……こんなに大きくて立派に成長していたのね。嬉しいわ」

「か、母さん。あんまりじつと見ないですよ」

弥生が褒めてくれるだけあつて、康太郎のペニスはかなりの巨根だ。手首から中指

## タイトル

を優に越える長大な竿肉に、指で円を作っても収まりきらない幅広の幹径。包皮は完全に剥けきつており、どれだけ萎縮していても亀頭冠に皮は被らない。

特に、雁首の鋭い張り出しと鈴肉の膨張具合は、康太郎自身密かな誇りとしていた。

(この年齢になつて、母さんにち×ぼをじつと見られるなんて……)

同性の友人には堂々と自慢できる逸物だが、義母である女性に見られるのは羞恥の極みだ。三十八歳の美熟女と一つ屋根の下で暮らしていた弊害で、これまで他の女に魅力を感じず、大学生となつても未だに童貞なだけに、初めて性器を見られるのは酷く緊張する。

「ふふ、ごめんね。それじゃ、康ちゃんとお話ししながら抜いてあげる」

「うっ……ああっ、すべすべの指が、僕のち×ぼに……」

羞恥に頬を染める息子がおかしいのか、義母が愛おしげに微笑む。もつとも、弥生がどんな表情をしていたかなど、康太郎にはしつかりと確認する余裕はなかった。

(すご……いつ、母さんの手コキ、メチャクチャに気持ちいい)

十九歳の康太郎にとつて、自慰は半ば日課に等しい。それこそ精通を迎えてから優に千は越えているであろう手淫だけに、男根をどう握り、どうやってせんずりするのが望ましいか、感覚的にわかっている。

それは畢竟、どの程度の快樂を得られるかを無意識に予期してしまう。

（僕のオナニーと全然違う……指だって細くて握る力だって弱いのに……母さんの手コキの方が、ずっと気持ちいいっ）

自分のペニスなのだから、どうやれば一番気持ちいいオナニーになるのかは知り尽くしている。それなのに、初めて異性として逸物に触る未亡人の方が、康太郎よりも遙かに色濃い快樂を流し込んできた。

白く清らかな織指が卑猥な肉幹に触れ、宿り木の如くみっちり絡みつく。柔らかな圧迫と淫らな摩擦が生じる度に、竿肉が甘やかな痙攣を起こし、肉根にぶら下がっている陰囊が獣の悦楽に舐まれてぐんと引き上げられた。

（凄く手慣れた感じがする……母さんが、こんなに手コキが上手いなんて……）

いつもにこやかで優しい、どこかあどけなさすら感じる義母。豊熟した身体つきはともかく、本人の性格もあって女としての艶やかさを誇示したことはただの一度もない。その印象から、弥生は男女の性に稚拙なのだ、康太郎は心のどこかで勝手に決めつけていた。

（そうだ……母さんは、未亡人なんだ）

## タイトル

弥生は義父である恭平の妻だ。同じ年の花蓮だって出産しているのだから、童貞の

康太郎とは性経験の深みが天と地ほど異なる。手淫だって、夫に何度も淫らな奉仕として行っていたから、これだけ巧みなのだろう。

その事実を目の当たりにしても、どうしても違和感が拭えない。これまで優しい義母としての顔しか見せていなかった美熟女が、淫らな性戯に長けていたという激しいギャップが、康太郎の興奮を飛躍のなまでに高めていく。

我慢汁がじわりと鈴口に滲み、それはたちどころに亀頭の先端を濡らしていった。

「あら、おちん×んの先からエッチな涎が出てきたわ。ふふ、凄い量ね。康ちゃん、そんなに私の手が気持ちよかったの？」

「う、ん。自分でするより、気持ちいい……くうっ」

自慰よりも上と言われて、気分がよくなったのか。心なしか弥生の口元が緩み、細い指がより執拗に竿肉に絡みつく。

（鈴口を穿られて……こんなやり方があるなんて……）

亀頭の先端にうがたれた、股間にまで通された肉の管。義母の細い指が出口からクチュクチュと我慢汁を掻出し、指にべつとりと纏わせてから竿肉を降らせる。

手首を立て、淡精にてらてらと濡れた指先が雁首へと潜り込む。螺旋を描いた義母の指が裏筋をすべり、淫らな飛沫がはじけた。



陰毛の隙間や玉袋の裏側に籠もっていた汗がむわりと立ち上り、据えた臭気が漂う。こんなものを弥生に嗅がれると思うだけで、羞恥が腹の奥から込み上げてきた。

「うう、気持ちいいよ。母さんの手、こんなエロいなんて……ううっ」

義母の優しい顔立ちには、この淫戯の最中にあっても変わらない。それなのに、指だけがまるで洗練された娼婦の如く媚態に乱れた。その光景は竿肉を利用したポールダンスさながらであり、絶技といっても差しつかえない快感を豪肉の根元から炙り出していく。

康太郎自身が驚くほど精涎が漏出し、そそり立つ巨根はローションを垂らされたように下品で卑猥な光沢を放っていた。

（しかも、柔らかくて大きなおっぱいが目の前でぼよぼよ弾んで……）

膝枕をされてふとももに寝転ばされている康太郎だが、その直上には母性の象徴とも言える魅惑の熟乳がある。極上の柔らかさを持つ乳房は、女の腕が過激な昇降を行うたびに連動し、ゆさゆさと官能に弾んだ。

弥生のバストサイズはGカップという紛うことなき巨乳であり、その振幅も比例して大きい。義母の肩が微動し、二の腕が乳房の側面に擦りつけられるたびに、たわわ

## タイトル

な実りが宙をバウンドし、ブラウスとカップが悩ましげな衣擦れを生じさせていた。

（さっきまでは、そんなに気にならなかったのに……）

目覚めてからごく普通の膝枕をされている時は、いくら魅惑の膨らみとはいえ、そこまで視線を釘付けにされなかった。むしろ、頬に触れていたふとももの感触や甘く香しい熟母の匂いに注意を奪われていた。

しかし、動物としての本能なのだろうか。静止していた巨乳が揺れ始め、艶やかにブラウスのシワを変形させ始めると、途端に視線は義母の柔乳へと吸い寄せられる。

牡の業とでもいうべきなのか、どれだけ視線を逸らそうとしてもほんの僅かにでも気を緩めれば、目の前で躍る女の膨らみに焦点が合わせられてしまう。

「あらあら、康ちゃんたら熱心におっぱい見て。男の子はおっぱいが好きって聞いていたけれど、やっぱり本当だったのね」

「い、いや……それは……」

康太郎の執拗な視線を、俯瞰している弥生が見逃すはずもない。興味を否定しようと試みるも、正直な欲望がその先に続くはずの言葉を紡がせなかった。

「本当？ ママの生おっぱいを見たくないの？」

ペニスを握っていた繊指が、僅かに動きを鈍らせる。代わりに、康太郎の頭を緩や

かに撫でていた手がそっと引き戻され、ブラウスのボタンに指がかけられた。

義母がさして躊躇う様子もなく、ボタンをするすると臍付近まで解いていくと、押し込まれていた熟乳がブラと一緒にこぼれ落ちる。

(相変わらず、こんな可愛らしいブラを付けて……)

義母と二人の義姉は、皆それぞれにカップサイズが違う。そのため、康太郎がまだ実家にいた頃は、家事手伝いで洗濯物を干す際に、どのブラが誰のものなのか一目でわかったものだ。

中でもサイズが大きく、可愛らしいデザインがもつとも多いのが弥生だった。康太郎の目の前に露出させられたブラは男にとっては目の毒ともなる淡いピンク色で、カップには華やかなレース模様が描かれている。

三十八歳という年齢を考えればややちぐはぐな印象を受けるブラだが、そもそも弥生は童顔気味なので実年齢より遙かに若く見られる。おまけに可愛らしい美人なので、こういった趣向がことのほかよく栄えた。

(見たい……母さんのおっぱい、生で見たいっ)

可愛らしいカップに包まれた義母の巨乳だが、ほぼ真下から見上げているので、生の乳肌はほとんど見えない。いつもならブラを見ただけでも幸運だと思っただろうが、

## タイトル

牡の果てしない欲望はカップの裏側に納められた乳房の全容を欲して止まない。

康太郎の本能を何よりも忠実に代弁する肉の凶柱が、強欲を示すようにより硬く、より雄々しく義母の手の内で膨れあがる。

「母さんの……おっぱいが見たい」

穢れた熱望に灼かれた十九歳の喉が、酷く哽れた欲を紡いだ。義母の乳房を求めるなど、あまりにも浅ましく醜い。本来、こんな義息子に向ける瞳は卑下と侮蔑こそが望ましいだろう。

「甘えん坊さんね、康ちゃん……いいわ。ママのおっぱい、見せてあげる」

それなのに、義母の眼差しは何処までも優しく、柔和なままだ。康太郎が赤裸々な欲望を口にする緊張に声帯が触まれたというのに、弥生は慈愛すら感じられる穏やかな美声で、背徳の願いに応じる。

ブラウスに添えられていた美熟女の繊指が、背中へと回される。僅かな沈黙を挟んだ後、カップがずると滑り落ちる。用を為さなくなったブラをしなやかな指が掬い上げ、豊かな双乳にふわりと置いた。

(これが、母さんのおっぱい……なんて綺麗なんだろう)

弥生の義息子となって十年以上になるが、裸を見られたことはあっても裸を見たこ

とはない。母子でプールに行ったことはあるが、母子で風呂に入ったことはない。

初めて見る義母の乳房の前に、康太郎は皿のように双眸を見開いた。

繊細でなめらかな二つの乳房は、夏場にあつて初雪を彷彿とさせるほど白く輝く。

両手で掴んでも溢れるであろう熟れた乳肉は、三十八歳という年齢でありながら瑞々しさを損なっておらず、白磁の碗を彷彿とさせる張り維持している。

乳房の先端を盛り上がらせる鶉色の突起は、母乳を出していたとは思えないほどに慎ましく、美しい乳暈を形作っている。

これまで成人向けの動画や写真はいくつも見てきたが、そのどれよりも圧倒的なまでに綺麗でエロティックな未亡人の熟乳に、康太郎は息をするのも忘れた。

「すっかり見とれちゃってるのね。ちよつと恥ずかしいけれど、嬉しいわ」

「うあつ、母さん、また——くうつ」

呼吸を忘れていた肺を無理矢理働かせたのは、康太郎ではなく竿肉への刺激を再開させた義母の手淫だった。弥生の生乳を前にした感動と興奮に鈴肉を野蚕に膨らませ、獣の熱が溜め込まれる。

（目の前で母さんのおっぱいが、ぶるんぶるんって揺れて……エロ過ぎるよ）

ブラの支えがなくなった分、三十八歳の熟乳はより官能の躍動に弾みを付ける。白

## タイトル

くきめ細やかな乳肌がなめらかに伸び縮みし、赤みを帯びた残影が網膜をよぎった。

（こんな綺麗なおっぱいなら、ずつと見ていたい）

この美しくもエロティックな膨らみを触りたいという、牡として当然の欲求。その一方で、この芸術に等しい柔らかな双乳をずつと眺めていたいという衝動も湧き上がってくる。

義母の指で男根を握ねくり回される快楽に酔いながら、康太郎は魅入られたように鼻息を荒くして宙を弾む巨乳を見つめた。

「あらあら、康ちゃん。お口から涎が溢れちゃってるわ」

「え……あつ——」

口を閉じるのも忘れて、義母の生乳を眺めるのに夢中になっていたのだろう。弥生に指摘され、ようやく康太郎はだらしなく弛緩した口角から唾液が溢れ、頬を伝っている気が付く。

大量の涎を慌てて嚥下し、粗雑に腕で拭っているとクスリと弥生が目尻を細めた。

「もう夕方だし、お腹が空いてきちゃったのかしら。でも、おやつは我慢してね。その分、康ちゃんの好きなもの作ってあげるから」

「ち、違うつてば。これは——」

弥生のおっぱいに見とれていたんだ——と、正直に告白しかけ、寸前で口を閉ざす。腹を空かせた子供扱いされるのも恥ずかしいが、生乳に我を忘れていたなど、童貞であるという事実を踏まえてもなお汗顔の至りだ。

「ふふ、冗談よ」

まだ拭き損ねていた涎を、義母のしなやかな指先が掬い取り、桜唇に含んでぺろりと舐め取る。その何気なく行われた行為に酷く淫猥な蠱惑を感じ取り、康太郎はぞくりと肩をふるわせた。

「康ちゃんが本当に食べたいもの……ママがちゃんと食べさせてあげるわ」

不意に、視界が薄暗くなる。それが、膝枕をしてくれている弥生が前屈みとなり、豊かな熟乳が視線を遮っているからだ気づいた時には、康太郎の顔面は乳肉に押しつぶされていた。

（顔に、母さんのおっぱいが）

義母が豊乳を顔に乗せてくる——自分の置かれている状況が理解できず驚愕に叫ぶものの、鼻も口もしつとりと柔らかな乳肉に覆われているため喉から唸りが響くだけだ。

「あ、んっ……康ちゃんの鼻息、くすぐったい」

## タイトル

周章と混乱の治まらない康太郎とは対照的に、弥生は肩をおかしげによじらせ、くすぐすと余裕に満ちた笑声を転がす。

「驚くことはないのよ。ほら、これが食べたかったんでしよう」

康太郎の視界を覆っていた乳肉が、弥生の右手によって押し下げられていく。黒一色に塗りつぶされていた光景が、見慣れた天井と眼下にある真っ白な乳肌を捉えた刹那、唇を擦っていた柔らかな感触が変わった。

（これ、乳首だ……母さんの乳首が、唇に触れて……）

三十八歳とは思えないきめ細かな肌に落とされた、色鮮やかな突起。かつて、豊かな乳房から母乳を溢れかえらせていたであろう艶やかな乳首が、康太郎の唇に押しつけられていた。

「ママのおっぱい、吸ってみたかったんでしよう。ここにはママと康ちゃんしかいないもの。赤ちゃんみたいに、おっぱいに甘えていいのよ」

康太郎が乳首を吸いやすいよう、弥生が乳房に添えていた右手を柔らかに搾る。圧迫された乳肉が先端へと収束し、集められた血がツンと乳首を尖らせた。

（母さんのおっぱいを、僕が……）

見るだけでも恍惚としてしまった、美しく熟した双乳。目に映るだけで官能を惹起

させる、赤く熟れた乳頭。

女の母性の象徴を丸ごと口に含むことを、他ならぬ弥生が許してくれる。

「んっ……康ちゃん……くすぐったいわ」

躊躇し、選択する間もなく、牡の本能が勝手に康太郎の唇を動かす。半ば埋め込まれるようにして向けられた乳首の先端を舌先でべろりと舐めた。途端、弥生が全身をあえかに戦かせ、まつげをたおやかにそよがせる。

(本当に僕が母さんのおっぱいを……夢みたいだ)

義母の甘い乳首の感触を唇に感じ、康太郎は感動に我を忘れる。鈴笠家の女達の中で、一際存在感を示していた三十八歳の巨乳。服の上からでも無自覚に誇示してきた極上の乳房を、義息子でありながら口に含ませてもらっている恍惚。

十九歳の大学生でありながら、赤子のように義母に甘えられる背徳の解放感。理性が立ち塞がる間もなく、康太郎の奥底に秘められていた衝動が轟々と噴き上がった。

(母さんのおっぱい、なんて美味しいんだ。あぁっ、ずっと口に含んでいたい)

どんな形にもなる柔らかな乳肌とは異なり、鶉色の乳首は張りのある弾力に富んでいる。純粹なさわり心地という点では、シルクよりもなめらかな乳肌が遙かに上だ。

一方で、唇で挟み込まれてもいささかも崩さず、口内に含むと絶妙にフィットする

## タイトル

形は、否応にも乳首が哺乳を意図したものとなっているのがよくわかる。

本能の赴くまま、童貞である義息子は義母の豊乳を堪能する。大きく口を開き、乳量を頬張り、乳腺を吸い出すようにして口を窄める。さすがに母乳は出ないが、弥生のおっぱいを吸っているという幸福感はそれだけで麻薬の如く脳裏に滴る。

少しだけしよっぱさを感じるのは、ブラのカップで蒸らされていた汗の味だろう。もっとも、不快感というものはまったくない。むしろ、女性の代謝を舌で感じられ、より義母の乳房に吸い付いている実感が湧き上がってくる。

(匂いが違う……甘くて身体から力が抜けていく……おっぱいの匂いだ)

弥生の熟れた女体から醸成された、男の獣欲をくすぐるフェロモン混じりの匂い。その一部を担いながらもまったく趣の異なる、甘い安らぎを帯びた匂いが、豊潤な乳房からしつとりと揮発している。

息をするたびに成熟した男としての理性が軟化され、ぐにやぐにやに蕩けてしまいうような柔らかな香気。一呼吸するたびに胸が幸せに溢れていく母の熟乳の匂いに、康太郎は虜となつて鼻を鳴らす。

「んっ……くすぐりたい。もう、康ちゃんたら……本当に、赤ちゃんみたい。ふふ、こんな熱心に……あっ、ふぁっ……あぁんっ」

涎塗れにした義母の乳頭を、齒列に見立てた唇で甘噛みする。直後、柔らかな表情を崩さなかった弥生が眉根を寄せ、肢体をふるふると細やかに痙攣させる。桃色の美唇から、甘く切ない吐息が零れた。

康太郎のペニスも共鳴するようにビクンツと痙攣し、竿肉に浮かび上がった血管が鳴動するように勇ましい脈を打つ。

(ひよつとして、母さんが感じた？ いや、それよりも——)

いくら康太郎が童貞であろうと、女の乳首が強い性感帯となっているのはわかる。男が亀頭を撫でられただけで快感がこみ上げ息を乱すのだから、乳首を吸われた熟母が、心地良さから意図せず甘い嬌声を漏らすこともあるだろう。

(母さんの喘ぎ声……エロいなんて言葉じゃ表現しきれない……)

執着と言っても過言ではない、貪るようにして吸い付いていた母の乳首。腐心していた牡の衝動を、一瞬でも忘れさせる甘く艶やかなハニーボイス。

息をしているのも忘れさせる艶鳴きなのに、耳孔に潜り込んで鼓膜を浸透した義母の声は、若く精強なペニスをたちまち最高潮まで勃起させる。

(こんな……脳が蕩かされるような声を出せるなんて……)

十年以上、康太郎は弥生と一つ屋根の下で暮らしていた。それなのに、こんな艶や

## タイトル

かな声は初めて耳にする。あまりにも異質で、それでいて耳にするだけで獣欲を掻き立てる、三十八歳の甘すぎる嬌声。

単に、ラジオパーソナリティーという職に由来する発声の良さだけではない。誰が聞いてもその特異性を見いださずにはいられない。乳白色の喉から編み上げられる声そのものが、一種の淫戯に等しい。

「んっ……ふふ、康ちゃんのおちん×ん、また大きくなったね。それに……とっても熱くなってる。ママのエッチな鳴き声に興奮しちゃった？」

「……ごめん、母さんっ——ぐうっ」

露骨なほど男根が脈打ったので、康太郎が喘ぎに反応したと弥生もわかったのだろう。肉杭と呼ぶにふさわしい卑柱を、弥生はより圧迫し、よりリズムカルに白い指を絡めて扱っていく。

尿道に溜め込まれていた淡精がびゅるりと溢れ、勢い余って下腹に付着した。

「いいのよ。ママのおっぱいと手と声で、いっぱい気持ちよくなって」

言葉の最後に、弥生はふうとなだらかに吐息を落とす。康太郎の耳朶に義母の温かく湿った吐息がかけられた。こうすれば男が快感を得ると知っていたのだろう。康太郎がびくりと肩を震わせると、ペニスを握る義母の手が激しく昇降した。

「あぁっ、くぅっ……か、母さん、もう出るっ。射精しちゃうよっ」

淡精を絶えることなく漏出させ、豪槍と化した男根を股間から隆起させているだけあって、もう限界は目前だ。射精の兆候を捉えた陰囊がひくひくと不穏な収縮を繰り返す。

「いっぱい出して。ママのおっぱい吸いながらお手々の中でいっぱい射精してちょうだい。息子が大人になったところを、ママに見せつけて。あんっ」

もう、射精衝動には火が付いてしまっている。放胤は避けられないと本能が察知し、より性悦を貪り狂う方針へと切り替えられた。これまで経験したためしのない桁違いの快楽に溺れる十九歳は、理性を忘れて三十八歳の乳首に力強く吸い付く。

強烈な吸引によって美熟女の乳首がパンパンに膨れあがった。母乳を出せとばかりに舌先で舐め回し、性感を刺激された弥生が甘媚な嬌声を奏でる。

美熟した義母の牝鳴きは若い義息子の劣情に拍車をかけた。刻一刻と肉の愉悦がペニスの根元へと注がれ、胤汁を打ち出そうと睾丸がずんぐりと引き上げられていく。

「あぁっ、もうダメだっ。ママ、出るっ。精液、漏れちゃうっ！」

陰囊に圧縮されていた胤汁が解放され、竿肉の根元が灼熱を孕んで肥大する。射精を目前にして身体がガクガクと痙攣し始め、康太郎は絨毯に爪を深々と立てて放精に

## タイトル

備えた。

「見せて、康ちゃん。ママの手で、いっぱい精液をお漏らしして」

肉樹を扱っていた繊細な指が、卑猥な泡をこびり付かせながら下降し、根元を強く締め上げる。その最後の圧迫が絶頂の引き金となり、尿道に流れ込んだ胤汁が竿腹をぼこりと膨らませた。

「出るっ！ あぁっ、精子、出るっ！ ママッ！ おおっ！」

獣に回帰した康太郎が本能の赴くままに雄叫びを上げた刹那、亀頭がびくりと痙攣し、ぐばりと開いた鈴口から猛烈な勢いで濃精が噴き上がった。天井に肉薄する放物線を描いた後、弥生の美しい黒髪に穢らわしい胤汁がべたりと付着する。

牡の生臭い精臭がむわりと揮発し、周囲に卑猥な匂いが立ち籠めていく。

(なんて射精だ……こんな絶頂、初めてだ……)

精通した時に浴びせかけられた、初めてのエクスタシー。前例もない肉悦に意識が席卷されたあの一瞬は、空前の快感に恐怖すら抱いたものだ。

その人生最高の射精をも上回る、信じがたい快楽。悦楽に吞まれた意識は、視界を白く染め、耳から音を消し、僅かとはいえ康太郎の意識を消し飛ばした。

第一波の勢いこそないものの、弥生に握られたペニスからは途切れることなく精液

が垂れ流されており、陰毛の隙間に染み卑囊にまでべったりと垂れている。

鈴口から新たな精子が吐き出されるごとに、腰だけが別の生き物のようにびくびくと跳ね上がった。部屋に漂っていた獣臭がよりいっそう濃くなり、牡の粘りを帯びた性臭が部屋の空気を澱ませる。

(これが、母さんの手コキ……人妻のテクニク……)

童貞の十九歳が欲求不満に耐えかねて行う自慰行為とは、まったく質の異なる充溢感。これまでの自慰で発露していた絶頂と射精は児戯だったのかと懷疑すら抱きかかない、至高の快絶。

(手だけで、この快感だったんだ……それなら、母さんのセックスは——)

一体、どれだけ男の身体を骨抜きにできるのだろうか——微睡みに似た恍惚の余韻に浸りながら、康太郎はぼんやりとそんなことを思った。

「ああ……やっぱり、若い男の子の精力は凄いのね。なんて濃いネバネバなのかしら……ふふ、おちん×んもたまたまも大きいだけあって、いっぱい出たわね」

ようやく精液の噴出が止まった肉樹から、握っていた掌がゆっくりと緩められる。卑肉から指が離れるごとに、我慢汁と胤汁の合わさった粘液が、ねっとりとした太い水系を引いた。

## タイトル

弥生は手首を掲げると、その濃厚な粘性を楽しむように掌を開閉させ、康太郎が出したばかりの胤汁をニチャニチャと猥雑な水音を立てて混ぜ合わせる。

その行為は、下品であるはずなのに、酷く無邪気なものに見えた。

「ふふ、髪にまで飛んじやつてる……ああ、なんて濃い匂いな」

ウェービーロングの黒髪に糊の塊の如く張り付いた欲汁を、弥生が指先で摘まみ上げる。二、三度親指と人差し指でぐちゅぐちゅと練り合わせると、義母は鼻先に近づけ、深く息を吸い「はぁ」と悩ましげに双眸を潤ませた。

(母さんが……あんなエロい顔をして……)

手淫をし、乳首を吸わせた時でも、優しげでおっとりとした目元だけは変わらなかつた義母。それなのに、康太郎の濃密な精臭を嗅いでいると、あの可愛らしい弥生の顔が徐々に崩れていく。透き通っていた双眸が曇り、美しく結ばれていた美唇がだらしなく舌を覗かせる。

それが発情した牝の顔だと本能が直感した瞬間、莫大な白濁を撒き散らしてゆっくりと下垂していた男根が、びたりと宙で止まった。絶頂の余韻が薄れていくに従い、巨根に相応しい猛々しい勃起を取り戻していく。



「あら、こんなにたくさん出して、まだ射精したりないのね」

康太郎が獣性を蘇らせるさまを眺めていた弥生が、指についていた白濁をぺろりと舐めた。舌に白濁が撫で付けられ、女の涎と混じり合うと義母の睫が艶やかに震えた。

「康ちゃん……もう一回、ママで抜き抜き……したい？」

まるで若い牡を挑発するような淫行に、竿腹に埋もれていた禍々しい血管がみちりと浮かび上がった。

夫が親友の息子を引き取りたいと相談してきた時、弥生は正直言えば相当に不安だった。自分がお腹を痛めた子でないこともさることながら、養子に迎えたのは男の子と来ている。実子である花蓮は女ながらに腕白で、まだ十歳にならないこともあって、弥生の言うことを中々きいてくれない。

血の繋がった娘ですら母親としてもあまし気味なのに、更に男の子が来たら目を回してしまうかもしれない——そんな懸念があった。

しかし、当の康太郎は弥生の想像とは大きく乖離しており、大人しく素直で、全く手間のかからない子だった。しかも、やんちゃだった花蓮が右も左もわからない弟の

## タイトル

面倒を見るようになってから随分と落ち着き、トラブルが大幅に減るというメリットも生じた。

食事を作る量や洗濯物の数は多少増えたが、家族四人が五人になったところで仕事量の増加と負担などだが知れている。加えて、可愛らしい少年がやがて「ママ」と慕ってくれるようになったのが嬉しく、弥生はいつしか康太郎を我が子同然に愛するようになった。

（大切な康ちゃんが苦しんでいるのに、私は母親として何もしてあげられなかった）

康太郎が中学校に進学してしばらく後、弥生は義息子から母としてだけではなく、女としても見られていると気づいた。

もつとも、戸惑いはしたものの、義息子に嫌悪や忌避の感情は生じない。康太郎が鈴笠家で一つ屋根の下で暮らすにあたり、弥生は義母として年頃の少年の心理を知るべくある程度の勉強はしていた。特に、異性への興味は女とはまったく違ったメカニズムから成り立つことを、養育者としてきちんと把握していた。

（もちろん、わかっているも最初は内心びっくりしてしまっただけ……）

成長期の少年というものは、相手が実の母や姉妹であろうとも欲情してしまうケースすらあるらしい。それならば、真つ当な成長をしている康太郎が、血の繋がって

ない弥生を性の対象にするのは仕方ない。

ただ、困ったことに、康太郎の心情を察することはできても、弥生は何もしてやれない。義母である限り、義息子の性欲を帯びた視線に気づかないふりをし、ただ先行きを見守ることしかできなかった。

(もし、本当の息子なら、きちんと諭していたのだけれど……)

血が色濃く繋がっている女を異性として見てはならないと言うなら、近親相姦の危険性を論拠にして説得できただろう。しかし、実子ならともかく、養子である康太郎にはそんな道理は抜本的に意味をなさない。

しかも、義息子の視線は確かに淫らな獣欲を宿したものであったが、鏡や窓硝子を介して覗き見た顔は、常にやりきれない罪悪感と自省を帯びていた。

本能による衝動を理性が必死に抑え込み、そうした苦悶が表情に出ているのを知ってしまふと、迂闊に追及することなどできない。悪気がないならまだしも、自らの行為を恥じ入っているのだ。下手に説教すれば、これまで築いた母と息子の親愛が一挙に崩壊しかねない。

結局、弥生にできることは「こうした男子の傾向は多感な年齢に伴う一時的なもの」という教育書に記述された一文を信じ、時の解決を待つことしかなかった。

## タイトル

(康ちゃんの想いの強さを、私は見誤っていた)

ところが、中学生から高校生になっても、康太郎の視線は一向になくなる気配がない。しかも、時が解決するどころかより強くなっており、伴侶を亡くして未亡人となっていた弥生を大いに戸惑わせる。

康太郎の温和な性格上、夜這いやレイプに走る可能性などまったく考慮していないが、それでも義息子から女として意識されるのは問題だ。

欲望と好意のベクトルを逸らすべく「彼女でも作ってみたら？」と、何度か雑談を交えて誘導してみたが、康太郎は曖昧に苦笑するだけだった。

血筋は異なるとはいえ、親の最頂目を抜きにしても康太郎はルックス・知性共に優れた少年だ。本人が教えてくれなくても、同級生である花蓮が「康がまたフツた」と、恋愛事情を教えてくれるので、女子にも人気があるのはわかっている。

それでも頑なに彼女を作らないのは、単純に性欲だけではなく義母に恋愛感情すら抱いているせいではないかと、弥生に懸念させた。

(あの時の疑念は、康ちゃんが大学受験を控えてから確信に変わった)

進学する際、康太郎が隣の大学に入るため一人暮らしをすると知らされ、弥生は酷く困惑したのを覚えている。康太郎の成績ならば、地元にもっと適したいい大学が

ある。それなのに、義息子はわざわざ隣県まで引越して同等の大学に行くといひ出したのだ。

その大学にしかない魅力があるのならばともかく、康太郎はどうでも代替のききそうな動機をあげるばかりで、実質デメリットしかない。物分かりのいい康太郎とは思えないほど一人暮らしに固執する様を見て、これは家族を女として見てしまう自責の念からの逃避だと弥生は直感した。

(この子は、優しすぎるわ)

康太郎は弥生を含めて家族の誰とでも仲が良い。引越した後は毎日メールか電話で弥生達と頻繁に遣り取りしている。それなのに、電車で一時間ほど揺られれば自宅へ戻れる土地にいながら、夏休みまで頑なに戻ろうとしなかった。

時折送られてくる一人暮らしの写真も、弥生には何処か作爲的な印象が否めない。如何にも元気でやっていると見せかけ、家族に心配をかけまいとしているようにしか感じられなかった。

(ごめんね、康ちゃん……もう、我慢しなくてもいいのよ)

家族に会うのが辛いから、住み慣れた実家に戻るのすら苦慮する——そんな悲惨な状況に義息子を追い込んでしまったのは、義母としての怠慢が招いたツケだ。

## タイトル

血の繋がりが無い、本当の親子ではないといった事実尻込みし、遠慮や配慮といった体の良い逃げ口上を掲げた結果、康太郎は己から遁出するような行動に出たのだ。  
(康ちゃんがいないと、みんなも元気がなくなるもの)

進学と同時に花蓮は格段に女らしく可愛くなったものの、康太郎が出て行ってからあからさまに覇気がなくなった。摩耶も口にこそ出さないものの、何処か雰囲気が変わってしまったている。

(それに……私も寂しいのよ)

何より、弥生自身が康太郎と何のわだかまりもなく暮らしたいと強く望んでいる。

育ての親として愛情をかけて育てた義息子が、罪悪感に潰されそうになりながら実家に戻ってくるなど、家族の在り方として絶対に間違っていた。

(康ちゃんが苦しんでいるなら、私がママとして楽にしてあげなくちゃ)

夫が存命なら話は別だが、今の弥生は未亡人だ。義息子の願いをすべて叶えてやることはできないだろうが、性欲くらいは発散させてやれる。

幸いにして、康太郎と血は繋がっていないのだ。皮肉な話だが、これならば倫理的な側面から見ても、親子ではなく男女の問題として扱える。

(すつきりすれば、康ちゃんだって気兼ねなく摩耶ちゃんや花蓮ちゃんと過ごせるは

ず……恭平さん、そうでしよう？)

弥生だけではなく、美しい義娘と可愛らしくなった娘を前にして、康太郎が当惑を隠しきれなくなっているのは、うすうす感じている。それならば、義母として康太郎が家族に欲情しなくなるまで、性欲を発散させてやりたい。

それが、義母としてのせめてもの償いだ。亡夫も、きつと理解を示してくれるに違いない——そう、弥生は思った。

「ああつ、母さんっ……これ、凄……ううっ」

両の掌からこぼれ落ちようとす豊かな乳肉を左右から掬い上げ、ベッドに腰掛けしている義息子の股間にゆっくりと降ろしていく。双乳の間に挟み込んだ極太の男根に乳肌で官能の圧迫をかけると、康太郎が切なくも悩ましい悲鳴を紡いだ。

まだ、射精をしてからさほど経っていないからだろう。絶頂に伴う肉悦の熱が抜けていない卑肉は、乳肌でそつと愛撫するだけで悶絶するようにビクビクと竿根から瘻を走らせる。

## タイトル

「もつと気持ちよくなっているのよ。ふふ、康ちゃんのネバネバしたミルク、ママのおっぱいでたくさん搾ってあげるんだから」

乳房で作られた淫らな柔筒に義息子のペニスを挿入させ、柔らかに昇降させてやる。吹き零れていた精液を潤滑油に用い、乳肉でむにゅりと挟み込んでやると康太郎が「ううっ」と喉を反らせ、甘美に呻いた。尿道に僅かに残っていた精子が、再び染み出した我慢汁に押し出され、とろりと裏筋から垂れていく。

(気持ちよさそうな顔……見ているだけで幸せな気持ちになっちゃう)

Gカップの巨乳を惜しげもなく抱え込み、熟れた未亡人の柔らかさで包み込む。胸の谷間から顔を出す亀頭がビクビクとはしたなく喘ぎ、義息子が歯を食いしばって嬌声を嘔み殺す様を眺めていると、心の底から喜びが込み上げてきた。

十年以上、自分の息子として大切に育ててきた少年。優しく、逞しく成長した義息子が義母にバイズリをされ、幸せに蕩けてだらしなく喘いでいる。

(こんな良い子が、私みたいなおばさんに欲情してくれるなんて)

自分の容姿に多少の自信はある弥生だが、それでも一児を産んだ経産婦であり、今年で三十八歳になる。若く見えるとは言われるが、決して若いわけではない。

それなのに、美少年と呼んでも差しつかえない成長を遂げた康太郎が、青く瑞々し

い同年代の少女ではなく、赤く熟れた義母に興奮してくれているのだ。

（こんなことで喜んでしまうのは、不謹慎だってわかっている……でも——）

決して世間に公表できない背徳の行為なのに、若い少年に喜ばれ女として求められている事実に、身体から甘い搔痒が沸き上がる。

「ずっと、母さんのおっぱいでパイズリして欲しかったんだ。ああ、夢みたいだ……ううっ、ごめん、母さん……こんな息子で……ああっ」

「いいのよ。男の子はみんなおっぱいが好きだって、わかっているもの。ほら、おちん×んをおっぱいで溺れさせてあげる」

（体験版終了）